

# 学科の枠を超えて学べる総合選択制を採用。 高い専門性と幅広い視野・知識を育てる

4つの学科の幅広い科目で  
「柔軟な専門性」を育む

2012年、酒田市内にある4つの公立高校が統合し、山形県立酒田光陵高校が開校した。前身は普通科の県立酒田北高校と同酒田商業高校、同酒田工業高校、そして市立普通科の酒田中央高校という異なる4校。各校の伝統を受け継いだ普通科、工業科（機械科・電子機械科・エネルギー技術科・環境技術科）、商業科（ビジネス流通科・ビジネス会計科）、そこに新たに情報科も加わり、多彩な学科を設置する大規模校としてスタートした。

「酒田市は古くから日本海に通じた交易で賑わってきた街です。伝統的な酒田市民の気風を反映させた校訓『進取、創造』のもと、一人ひとりが輝ける未来を目指して立ち上げた学校です」（鈴木和仁校長）

学校づくりのキーワードの1つは、従来の学科の枠にとられない「学際的な教育」だ。設立準備にも関わった鈴木校長は、その狙いをこう語る。

「これからの社会で生きていくためには、『財務諸表が読める旋盤工』ものづくりにも詳しい営業職』といった専門にプラスアルファをもつことが大切ではないでしょうか。産業界の変化は激し

いなか、今、高校の出口で求められるニーズだけを見るのではなく、生徒の人生を考えて『柔軟な専門性』を備えた人材を育てたいと考えました」

そのために導入した仕組みが、学科の枠を超えて多様な科目を学ぶことができる「総合選択制」だ（図1）。2年次は6単位、3年次は8単位、計14単位の総合選択枠を設置。他の学科も選択できる学科横断的科目群と、自分の学科の専門性を高めるための自学科科目群、合計147科目から進路や興味・関心に応じたカリキュラムを設計する。すべて学科横断的科目群から選択して幅広く学んだり、すべて自学科から選択して専門性をより高めたり、両学科群からバランスよく選択したり、さまざまなパターンが可能だ。

## 各学科の充実・自立と並行し 生徒・教員共に一体感を醸成

しかし、この総合選択制を軌道に乗せるには時間が必要だった。限られた時間数のなか、専門外の科目を選択するのは、自学科の科目を減らすことになる。実際に生徒の希望を取ってみると、学科横断的科目群を選択する生徒はごくわずか。総合選択制の目的を理解するのは、生徒はもちろん、科目選択の指導にあたる教員もすぐには

難しかった。

そのため、大規模合併のいちからの体制整備に奔走するなかでも「学際的な学び」というキーワードは失うことはなかったが、まずは各学科がそれぞれの特色をもって自立することを最優先に取り組んだ。工業科は前身校時代から定評のあった工業系資格取得への取り組みや、地元企業との連携に引き続き力を入れ、実績で他学科を牽引。商業科は、合併後の就職希望者の比率の高まりに合わせて指導の充実を図り、就職面でも強さを発揮するようになった。情報科は文科省より「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール」の指定を受け、大学や企業と連携した高度で実践的な教育を行っている。そして普通科は、女子が増加したことに伴い看護・医療系や福祉系の進路希望者が増え、その方面の実績や指導ノウハウを積み上げてきた。

学科ごとの充実化と同時に、学校としての一体感の醸成にも力を入れた。合併前から元の4校の生徒会交流や合同授業などを実施。合併後は、生徒も生徒会を中心に「自分たちで新しい学校を作っていく」と活動。学校行事のほか、地域の伝統的なイベントである酒田まつりに3学年全員で参加して山車を引くなど、結束を強めてきた。教員も多様性をもつ集団として力



工業科は前身校時代から地元企業と連携してさまざまなものづくりに取り組んできた。その関係性を合併後も生かしている。

情報科では情報系大学進学を見通し、情報テクノロジー、情報システム、情報コンテンツの分野を学習する。



を発揮していくため、同校の職員室は学科ごとではなく、全学科の教職員が入れる大部屋に。学科によって教員の価値観や生徒との関係性には特徴があるが、その枠組みを超えて状況が見えることで、互いに刺激を受け合っているという。

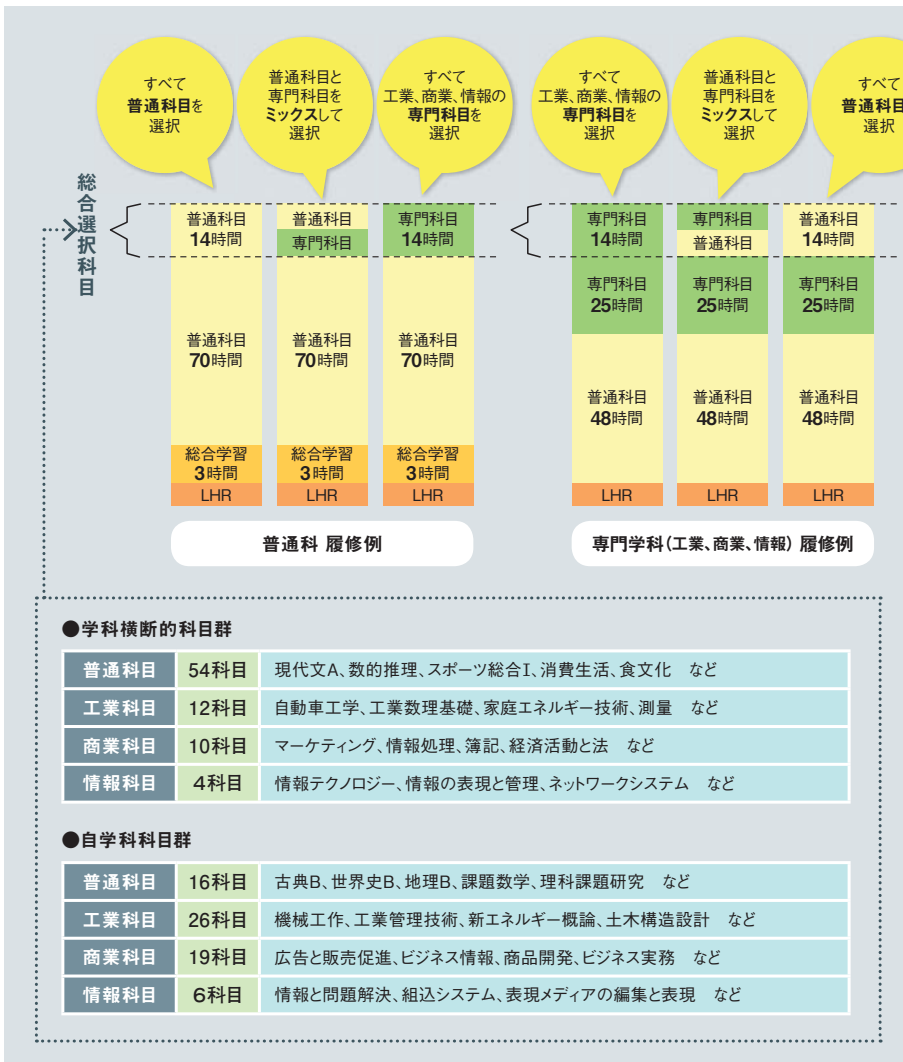
「例えば工業科は、危険を伴う機械作業も行なうなか、教員は生徒と師弟のよき関係になります。専門学科の先生の面倒見の良さが普通科の先生にとっては新鮮でしょうし、またその逆もあ

取材文／藤崎雅子



校長  
鈴木和仁先生

図1 総合選択制の仕組み



開校から5年が経ち、「改めて総合選択制の狙いを見つめ直して取り組んでいく段階」と鈴木校長。既に、普通科の生徒が商業科目を学んで就職に生

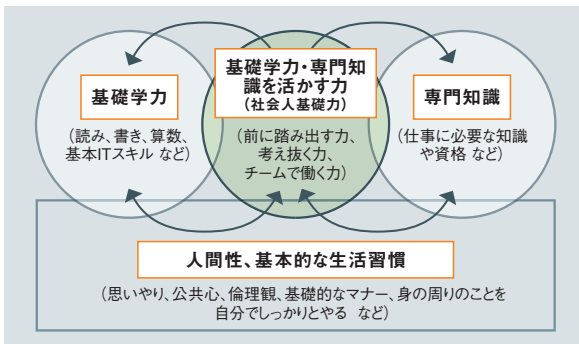
**各専門性を生かした協働プロジェクトも計画**

る。お互いにより刺激となっているようです(鈴木校長)

「これからは人の寿命も、働く期間も長くなる時代。今ある仕事や企業はいつまでもあるわけではないことは、さまざまなデータやニュースで伝えられてい

かす例は少なくない。商業科の生徒が工業科目を学んで工業系資格を取得し、製造業に就職した例もある。生徒の科目選択の幅は着実に広がりがつつある。また、教員の意識にも変化の兆しがあるという。

図2 社会人基礎力の育成を目指す教育のイメージ



経済産業省のWebサイトより

「これからは人の寿命も、働く期間も長くなる時代。今ある仕事や企業はいつまでもあるわけではないことは、さまざまなデータやニュースで伝えられてい

ます。高校教育もこれまでと同じままというわけにいかない、世の中の動きを見ていく必要があると考える先生が増えてきました。こうした先生方の意識は、生徒の幅広い学びへの関心や履修をいっそう促していくでしょう(鈴木校長)

**Editor's Voice**

**専門性プラスアルファの価値を伝えたい**

複数学科が一緒になった酒田光陵高校の環境は、多様な専門性によって成り立つ現実社会に近いものといえる。総合選択制や学科を超えた協働プロジェクトは、そんな同校だからその試みであり、他校が簡単に真似できることではないだろう。しかし、人口減少による同様な合併はこれからも起こり得るであろうし、なにより、実社会で活躍できる力をどう育成するかという観点では、同校のような異なる専門性や得意な面を生かして取り組む協働プロジェクトや課題研究の試みが参考になるのではないだろうか。

「昨年度、情報科のある班が、スマートフォンをかざすと近隣の観光情報が表示されるバス停を発表し、コスト計算も含めて発表したんですが、『それ、なぜ商業科とやらないの?』と。それぞれの専門性を生かした協働によって1つの研究に取り組めば、お互い刺激を受けながら、もっと面白いことができるのではないだろうか(鈴木校長)

総合選択制の推進だけでなく、学校全体のさまざまな場面において、当初から掲げる学際的な教育を本格化させていくという。

「課題研究」の授業や委員会活動を絡めて取り組んでいく計画だ。

また、従来は各学科が単独で取り組んできた「課題研究」においても、学科横断の可能性を探っていくという。